

ヒト受精卵の「ゲノム編集」容認 難病治療研究に道

2016/4/22 21:06

内閣府の専門調査会は22日、生物の遺伝子を自在に改変できる新技術「ゲノム編集」でヒトの受精卵を操作することを、基礎研究に限って認める見解をまとめた。遺伝性の難病などの予防や治療につながる研究に道を開くことになる。ゲノム編集したヒト受精卵を子宮に移植するのは、倫理面などで問題があり、容認できないとした。

総合科学技術・イノベーション会議の生命倫理調査会が中間報告をまとめた。今後は文部科学省などが研究者向けの指針作りを検討する方針だ。

ヒトの受精卵が育つ段階でどのような遺伝子が働いているかを解明する基礎研究は、適切な管理のもとで容認できるとした。受精卵を使った研究は一定の成長段階までに限定し、確実に廃棄することが条件となる。

一方、個人の能力を向上させるような、病気とは関係ない遺伝情報の改変は、様々な倫理的課題があるとした。ゲノム編集をした受精卵を子宮に移植する研究も認めない。受精卵に手を加えると、世代を超えて受け継がれるリスクもあるためだ。昨年4月、中国の研究チームがヒト受精卵をゲノム編集したとの論文を発表し、問題になった。

http://www.nikkei.com/article/DGXLASGG22H2E_S6A420C1MM8000/